
僕の存在は幽霊同等

勿論西村

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の存在は幽霊同等

【Zコード】

Z8019Y

【作者名】

勿論西村

【あらすじ】

僕は前向きではないと思う、
どちらかと言うと後ろ向きだ。

授業中にもそんなネガティブ思考を働かせている・・・と

三階の窓の外にありえない光景を見る。
そこから僕の最悪な人生が始まる。

「コレはあくまでも僕の考え方

この世界に生きる者はすべて価値を決められているようなものだ
勉強ができない、運動ができない、成績が悪い、
学生はソレ等（他）で価値を決められる。

僕『山本統也』もソレ等で価値を決められた……気がした。
成績は平均に後ちょっとで達する位、
成績は平均に後ちょっとで達する位、

運動は50m7秒後半

友達は殆んどいない・・・いや、一人もいない
そして僕は価値が下位だ、だから誰も寄つて来ない
いつも一人、授業中も挙手しても無視されるだけ、
ま、あまり挙手しないけど。

出席の時なんか、顔を伏せてるだけで、居ない事にされる
今まで17年間生きてきて、腹立たしい言葉は

リア充！

最近では？はがない？でリア充は死ねなどと言つて
いるが死んだところで、僕がリア充になる事は誓つてない。

ぶつちやけ、僕が死んだところで誰も悲しまないし、誰も気づかない
いつそのこと死のうか？自殺？

そんなことして、何か問題になつたら嫌だ

自殺して執念残してその場所を呪うのもゴメンだ
靈媒師によつて苦しまれ召されるだけだ。

？ほん怖？とかで除霊とかでとりつかれてる奴、あれ苦しそうだ
ま、見せ方。演技だと思うけどね。

ソレと僕は靈の存在は否定も肯定もしない。
居てもいなくても害は無い

ならば、いつそ事故で死んだ方が良いかな。
そつちの方が執念残るか？

ま、良いやどうせ生きても死んでも同じだ
中学の時なんて、ちょっと事故して退院した翌日には僕の机に花が
添えられていた

綺麗な白菊。

先生すら取り除かない。

寄つて僕は死んでもよいのだ

だつたら死んでやりたいところだけど。
ただでさえ人に話す勇気すらないのに。

人を離すのは楽なのにな。

最後に人と話したのは・・・

「僕の鞄返せ、」

「へへへとつてみろ。」

そんなやりとりだつた、

そう、僕の鞄を取りあげた三人がパスし合つて
僕の鞄を返してくれない。

特にイジメではない・・・と思う

別に鞄を隠されたり、机に落書きされたりしただけだし
うん。イジメじゃないよ、かまつてほしかったんだ。
なら、話しかけてくれれば良いのに・・・

そう言う事を考えると・・・やっぱイジメだな

今となつてはそんな事は無い、イジメたところで利益は無いからな。
それだけ僕の価値が下がつてることだけど。
あげる気も、上げられる気もしない。

それどころか、いっそ下げて、居ないに等しいくらいにしてやりたい。

僕の存在なんていらないんだ。

昔は・・・と言つても中学生の時。
僕は学校に行くのが楽しかつたし

ゲームプレイが趣味だつた。

他にも漫画や小説も読んでいて飽きなかつた・・・が
『彼』との交流は楽しかつた。

しかし今の僕は友達も趣味もない。

生きてても無駄なのだから

『困つたのだ。』

遠くからそんな声が聞こえてくる。誰かが困つているのだろうか。
助ける気はさらさらない。

ふと伏せている顔を上げ、声主を探してみる。

しかし誰かが困つている様子もなければ、喋つているとも思えない。
気のせいだな。僕は友達が少ないから幻聴が聞こえたんだな

『ホントに困つたのだ。』

しかし、聞こえるモノは聞こえる。

何度も言つが助ける気は無い。しかし声主が気になる。

教室中を見渡し、確認する・・・と、ふと窓の外に目をやつた
そこに映るありえない光景に目が釘付けになつた。

この教室は3階。窓の外に僕と同い年くらいの女の子が立つていて
いや浮いている

「何で！？」

僕は思わず立ちあがり、大声を出してしまつた。しかし周りはそんな事は気にせず

黒板を見ている。ちなみに今は英語の授業

『困ったのだ。マジで困ったのだ。困り過ぎなのだ』
無視だ、あんなのは夢だ助ける気は無い、ましてあの女子には足が無い。

しかし、女子（いや幽霊だ確信した）は下向いて何かを探している様子だ。
まさか・・・

『困ったのだ、足が無いのだ』

「 ッ！ ！」

大声で叫びそうになるが授業中だと叫ぶ事を考え、すんのとじりでおさえる

こいつ、わかつてない。

成仏させてやるか。でも僕は靈媒師ではない。
ソレと苦しませる気は無い。

「先生、気持ちが悪いので、退席します」

僕が手を上げそう告げるが、こくんつ頷くだけで声を出さない先公
そこである、男子生徒（名前忘れたけど、確か佐藤なんとか）が
「お前の顔が気持ち悪いんだろう？」

「お前には言われたくない

そう言つので、僕は即答で返し、奴（佐藤何とか・・・たぶん）は
鏡をチェックした

鏡と一生相談してろ

せらに気分がオチ、僕が席から窓へと向かう。

「・・・・・おい・・・・・おい。」

『何なのだ？アタイは今困つてゐるのだ。』

「足・・・・探してんだろ？」

『お前、知つてゐるのか？』

「知らん、でも一つ言えるのが

「

君は幽霊で、僕はなぜか幽霊が見えるようになつてしまつた。

「こいつ、靈の加藤梓。今そいつになんで足が無いのかを説明中

「だからお前は幽靈なの！死んでるの」

「ソレはわかったのだ、だからなぜ足が無いのだ？」

幽靈は皆、足が無いものだと思うが、もしかしたら違うのかもしない。

あいにくこま見えるのはこいつのみ

「お前は他の靈は見えないのか？」

「見えるに決まってるのだ。悔らないでほしいのだ」

やつぱり俺はこいつしか見えないようだ。

「その靈に、足は付いてるのか？」

やつぱり僕の思つたとおりに、幽靈=足が無い

「ある」

「何だと！？」

てことは他の靈には足があるのか？

キーンゴーンカーン・・・チャイムが鳴つた。

「それでは授業を終わります。」

そうだった、今は授業中だった。

「アタイの足を探してほしいのだ。」

「断る。僕はそんなに御人好しじゃない。」

僕が即答で断ると、梓（靈）が頬を膨らませる。

「アタイは困つてるので、困つてる人を見たら助けるのが普通なのだ」

「お前、幽靈じゃん。」

「がーん！－！ そうだったのだ、アタイは幽靈だつたのだ・・・・・」

床に手をつき、落ち込む梓。周りは僕が独り言を言つてゐると思い、

冷たい視線

「なんで、こいつしか見えないんだろうか。」

「アタイには見えるのだ。今アンタの後ろで男の変質者の靈が全裸になつてゐるのだ。それから右では不良の靈が睡をかけてゐるのだ。それからグラサンの靈が頭でタバコを消してゐるのだ。」

やりたい放題だな。

「あ、今全裸の靈がアンタに抱きついた！」

「もう良い！ 気持ち悪い！」

ま、物理干渉が出来ないだけ良いか、見えないのは当たり前かな。
・・・・ならこいつは触れるのか？

僕がそーっと手を伸ばす。

「変態！ 何触る！ としてるのだ！？」

「あ、いやその、触れるのかなあ？」

「そんなんに触りたいなら、言つてくれれば良いのに。」

「違う！ そんな事は誓つてない。触つても価値も上がらないし。」

・・・

しまつた、取り乱してしまつた

「慌てるところが怪しいのだ・・・まあ、良いのだ触らせてあげるのだ（ひよい）」

梓が僕に手を伸ばす。するとスーと僕の身体を通り抜けた

「あれ？ 通り抜けたのだ。」

「やつぱり、触れないのか・・・・？ 触るには血の契約とかかな？」

「悪魔じやないからそんなんのは無いと思つけどね。」

「分かったのだ。（どپどپ）」

そつと血に何かを注ぎだした。赤い何かを。

コレつてまさか・・・

「トマトケチャップなのだ。」

「やつぱり！ 血だつて。血！ てか、ケチャップと血には触れんのか

！？」

「コレは靈界のモノなのだ。」

「

そうか、靈界のものなら触れるのか。

そう思ふといきなり、梓が僕にめがけて皿をなげてきた。

「（シユンツ）あぶねえじやねえか！」

「大丈夫なのだ。当たらないから。（ピュン）」

「そうか、当たらないんだつた（バシツ）」

思いつきリヒツトしたのが？

「アハハ、あたつたのだ。」

僕の顔からケチャップが流れ落ちて、周りの皆が絶叫したのは皿に見えている

僕は保健室に連れて行かれた。

「全く。お前のせいだぞ。」

「でも、触れるようになつたのだ。」

そう、ケチャップのせいかは解らないが、梓に触れる。

「貴方、誰と話しているのかしら？」

僕が保健室の椅子に座つて話していると（客観的に独り言）隣に、座つていた長い黒髪の女性に声をかけられる。

「貴方、もしかして・・・見えるのかしら？」

「ええ！君も見えるの！？」

僕は驚いた。僕以外にも見える人が居るのか・・・と

「ええ。見えるわ、貴方の後ろでチ○コをこすりつけている変態の

靈がね。」

最悪だ よりにもよつて、そつちかよ！――

不良やグラサンならまだいい、見えるのが変態だぞ！

「あ、いやソレじやなくて。女の子です。」

「ああ君と同い年くらいの子かい？」

よかつた、梓の事も見えるんだ

「そ、そうです！他のは見えないんですけど、彼女は見えるんです。」

「ソレはよかつたわね、貴方の後ろで『ピ
ン』してるのなんて見えたなら死ぬよ
そんなに酷いのか ！！！」

「それより、貴方名前はなんて言うの？」

「僕は、山本統也です。そしてこいつの靈が
知ってるわ、加藤梓ね。アタシは富山彩乃。」

凛とした顔で自己紹介をする・・・・・あれ? なんで梓の事知ってる
んだ?

「なんで知ってるんですか? 梓の事。」

「貴方レベルの人じや、2レベルほどでしょ?」

「レベル? 何の頭の? どうせ僕はレベル2の頭脳ですよ。」

「その子は1週間前に亡くなつた子よ。ま、靈力が弱い事もあるけ
ど。」

「? ? ? 意味がさっぱり分からぬ。」

「つまり、その子の靈レベルが2で貴方の見れる最大レベルは2程
度つて事よ」

うーんだから僕はそこまで靈を見る事が出来ないって事か?」

「ちなみに、最大は10レベルよ」

「それじやあ、富山さんはなんレベルくらいなの?」

「アタシ? アタシは・・・・・10よ」

ため息交じりにそう言つ富山さん

「10つて、最高レベルじやあ・・・・」

「あら。関心がありませんね。」

別にそんなレベル高くても嬉しくもない

そんな事より、この悪靈を何とかしてほしい。

「何とか出来ないわ。」

「はえつ! ?」

どうして僕の思つてる事が解つたんだろうか。

「レベル5以上になると半径1mの人間の心の中が読めるのよ。」

そんな能力が身に付くのか。

だんだん興味がわいてきて、僕はベッドに腰をかけた

「聞く気になつたの？」

「うん。」

「じゃあまず、この靈を見えなくさせる方法ね

「何だ有るんじゃないか。」

僕はさつきの言葉との矛盾を感じながら話しを聞いた。

「矛盾してると思つてるね。まあいいわ

「よくないよ、出来るのか、出来ないのかはっきりして！」

「出来るには、出来る。でも出来ない。」

「はあ何言つてんだこいつ意味わかんない。

出来るけど出来ない？

「もう一度言うけど、アタシは心の中を読めるのよ。」

僕は心の中を読まれ驚き、跳ね上がる

ヤベッ。読まれた。大変だな

「大変よ。見えなくさせるのは。」

「取り合えず、方法を教えてください。」

僕が真剣に富山さんの顔を見て言うと

富山さんが目を閉じ、

「ポジティブになる。ただそれだけ」

淡々と言つ。

何だ、それなら簡単じゃないか

「そろはいかないの。貴方レベルならまだ大丈夫、5以上行くと・・

・」

「どうか。他人の心の中が読めて、傷つき更にネガティブになるのか。と言つ事は、この靈レベルはネガティブレベルってことか？」

自分ではもつとネガティブだと思つてたけど、こんなレベルの高いネガティブ野郎が居るなんて、僕も救いようがあるな

「そろよ・・・どうせアタシは救いようのない、カス人間よ」

僕の目の前で床に手をつき傾れ込む富山さん

うわあめんどくせえ早く保健室を出よ。」

「どうせアタシはめんどくさくて、周りに誰もいないわ。貴方もアタシを避けるんでしょ？」

富山さんの周りには黒い空気が広がっているように見えた
知らん、こんなやつは知らん。助けても俺の価値は上がりない。

「そ、そう貴方はそんな人間なんだね。アタシを殺しても良いって
言つのね」

「良い！」

僕はこんなネガティブ野郎は見捨て自分がよければ良い
腰を上げ、僕は保健室を出た

「さて、コレからどうするか。取り合えずレベルを下げないと
僕が真剣に考えながら歩いていると梓が僕の顔を覗きこみ
「アタイの足はどうなったのだ？」と言つた。
「黙つてろ！」

どうやって、レベルを下げるか・・・取り合えず

「明日に向かつてはつしろー！！」

僕が右手を上げ大声で叫ぶと、近くに居た女子二人と目があつた
「ゲッ、何アレ。」

「キモつ」

駄目だ、明日が真っ暗で走つたら地の底に落ちそうだよ
どうせ僕の明日、未来は暗いんだよ・・・イカンこのままじゃ
「今までこのくらい道を歩いてきたんだ！明日も行けるよ。
「それよりアタイの足！」

「解つた解つた。明日も頑張るよ！」

「独り言だよ。キモイね。」

今まで暗かつたんだ、明日頑張つてもどうせ暗いんだろう。
なら頑張つても同じよな。

「ねえねえアタイの足。」

足がなければ、浮いてこの暗い底も越えられそうだな

「よし死のう！」

「スマセン！キモイとか言つてゴメンなさい！」

「叶まつむらやだめだよー。」

なぜか近くに居た女子生徒一人に謝られた。

ノラセラム

いや別に「諺たから」

「だ、だよね、まあアンタみたいなのが死んでも変わんないけどね」

死のう。

ダダダダダダダ
・・・・・

井心田に向かひて、坂の筋に

卷之三

屋上の風を思いセレ開くこの空極はアヘンで
「」んなどアラから落ちたら……

うん痛い！ 確実に痛い

「止めよ。どうせ死んでも真っ暗、生きても真っ暗」

—それよりアタイの足!—

お前が、わからぬそれしか言ひてなした！」

「井川深蔵」

「どうしたのだ、急に、氣味が悪いのだ。」

靈にそんなこと言われたくない！

靈にそんなこと言われる僕は・・・・・僕は

— 一体何なんだ

靈回等の影の薄い半透明な人體」

梓の足を探し出して、解放されやる。

「取り合えず。お前何処で死んだんだ？」

「うーんどうかの踏切で無残に死んだのは覚えてるのだ。」「無残に死んだのか。それにしてはこいつの靈力が弱いんじゃないのか？」

ま、僕には関係ないけどね

「その踏切が何処かわからないんじゃあ始まんないな。」「でもでも、無残に死んだのだ。」

「解つた解つた。無残ね」

僕があごに手を当てながら歩く。
誰かに聞いた方がいいな。

「と言うわけで、梓が何処で死んだか知つてますか？」

「あら？ 戻ってきたのね、見捨てたあなたなんか助ける義理は無いわ」

僕は保健室に戻り、富山さんに問い合わせた

「アタイ困ってるのだ。助けてほしいのだ」

「僕も困ってるんだ。解放されたいんだ。」

「アタシだって解放されたいわ、でも無理なものは無理なの

僕は奥歯をかみしめた

「テメエはそんな考えしつてからそなうなんだろ！？ ちょっとでも前向いて歩いてみろや！」

僕が立ち上がり、富山さんに怒鳴る。

それをうるさそうに耳を押さえる富山が腹立たしい

「前向いて歩いてりやあ絶対何処にだつて行けるんだ！ それを信じ

ないのか！？」

僕があつくなるのを冷静に見ている富山、その隣では梓が
あ
れ？

「梓は？」

「貴方がうるさいで出て行つたわ、保健室の周りにも観客が居るし。」

「しまつた 大恥かいたよ。もう生きる希望がなくなつたよ。
梓が居なくなつたなら、僕は自殺の方法を考えよう。
頭を押さえしゃがみ込む僕の前にスーと梓が姿を見せる
「あ、梓もどつて來たのか？」

「見えるよつになつたのね。」

「はえ？ 見えるよつになつた？ 元から は、マサカ！」

「貴方のポジティブさにより 一旦見えなくなつたよつね。」

「貴様！ 返せ！ 僕のポジティブ精神を返せ！」

「貴方がポジティブになつてもどうせ生きる道は無いわ。」

「うひひせ 信じてれば・・・今まで信じても叶つたことないな。」

「もつ僕はダメなのだろうか。地に手をつく
すると、富山が立ちあがり僕のもとにやつてきて手を伸ばした
「貴方はアタシと一緒に地獄の底に落ちるのよ。」

「いやああああああああああ

「貴様

」

「ヤダ。」

「まだ何も言つてない！せめて話しだけでも聞いて！
「ヤダ。」

そうかこいつ心の中が読めるのか。くそ

死んでしまえ死んでしまえ死んでしまえ死んでしまえ・・・

「ソレは何かの呪文かしら？」

「死んでもいいことないのだ。」

「

「黙つてろ！」

「アタイの扱いが酷いのだ。」

「あれ？ 梓、お前も心の中が読めるのか？」

僕が梓に問うと、当たり前のようだ宮山が

「読めるに決まってるじゃない。バカでしょ？」

知るか！そんな事実聞いてない！

「そうなると、ここにいて仲間はずれはあんただけね。」

「な、仲間はずれ・・・」

仲間はずれこの言葉は好きではない。

常日頃から仲間に入れない僕はいつも一人で居る事が多く

めつたなことでは人と話さない。

「ソレはかわいそうね。」

「そう、どうせ僕はすべて可哀そうな人間だよ。いや人間でいる資

格もないかもね

「アーティストが重くなつてゐる。」

はあ業がベツドこ率り府ハてハると

『金へ、二の子ほかいかい用達があるつよ。』

「まあ、どうか二冊読め――?」

業が大喜びで喜ぶ一一一笑一業を呪ふ

「もういい匂いがするわ。」

すると周りにそれまでいなかつた靈が4体ほど見えるようになつて

しまつた

・・・・ そうかあれは富山の心の声か

— そうよ、おめでとう。喜ぶと良いわ、そうなつた以上。ボジテイ

「 」

「ソレが出来ればいいのよ。中々ネガティブからポジティブになる

のは無理な

確かに僕も今まで頑張つてみたけど・・・・無理だつたな

はあこうなれば僕はこの腐れ女と同類になる。

『同類とは失礼ね。』

くそ、読まれたか。

「ねえアタイの足はどうなったのだ？」

「うだつた……！」

忘れてた。でも、今となつては「いつの足見つけても、他ののが見えるようになつたから意味ないな。ん？何か変な靈が近寄ってきた。

ガバッ（靈が脱衣。）

何イイイイイイ！－－またかこいつあの変質者の靈－－

ぐああああああああああああああああああああ

もつこんな世界は嫌だ。

幽靈が見えるようになるし、いい事は無いし。

「いっそ、転校でもして氣を切り替えるか？」

「もしかしたら、その学校が最先端技術を導入してゐるかも知れないのだ？」

「確實に、Fクラスだな……」

勉強もできなし、転校してもいいことなんてない。

そんな事を屋上で梓と話していると、ぐと腹の虫が鳴つた

「腹減つた。そう言えば夕飯がないな、帰りにスーパーでも寄つてくか。」

「半額弁当を取り合い、戦いになるのだ。」

止めた、そう言えば冷蔵庫に昨日のあまりモノがあつたけ……

「いっそ、部活でもやって氣分を晴らすか？」

「友達募集なのだ」

「残念な感じがするな・・・」

俺が提案する事をことじごとくけなしていく梓

「掲示板で友達作るとか?」

「何か、一昔前のオタクと黒い猫と仲良くなれそう。」

「いつも、二ートになつて探偵するのだ。」

「ドクペしか飲めなさそうだな。」

二ート、オタクなんて絶対ゴメンだ。そんな事になつた暁には、止めたそんな事を考えると、またレベルが上がる

テレテテツテテツテ

「上がつちまつた!」

「おめでとなのだ、5 6になつたのだ。」

「おめでたいのはお前の頭だ! うわッ増えた」

田のまえに見える幽霊が3対増えた。

でも今日まで見てきて思つたけど、あまり遠くのやつは見えないんだ仕方ねえ足でも探すか、暇つぶしに。

「行くぞ、」

「え、何処に?」

「足探し

そう言い放ち、僕は梓につかまり屋上から飛び降りた。梓に触れることができ、梓は飛べる、こいつを使えば空を飛べると僕はポジティブな事を考えた いや考えてしまつた

シユンツ

ドサツ

「ががが・・・レベルが下がつて干渉出来なくなつた・・・」

僕は思い切り、地面にたたきつけられて、記憶が飛んだ。

「い、いじは・・・ん?川?」

向こう岸に大勢の人が見えて僕に向かって手招きしている。

渡つた方がいいのか。

でもコレ渡ると死ぬよな。うん絶対死ぬ

こう言つ時に最後の希望に光が・・・・・

よし諦めるか

僕の人生闇しかないのに、光りなんて有るわけ無い。
全く、ちょっとだけでも希望を抱いた僕がバカだ。
そう思うと僕は川の中に足を入れ渡ろうとしたとき
ジヤバツ、急に足を抜いた。

「冷た！寒！この季節川に入るのは無理があるよ！？」
誰もいないのに、大声で叫んでしまった。
恥ずかしい。

そうだ、ここから生き延びれば、靈だから現世に伝わる事は無い。
どうにか、生き延びることを考えよう
まず、あの川を渡つたら終わりだ。
ポジティブになつて光を待つか。

「ねえ何してるのだ？」

「今忙しいんだ梓。後にしてくれ

「アタイの足は？」

「今忙しいんだ梓 は？梓！？」

僕の目の前にはいつの間にか梓の姿があつた。
あれ？でもなんで？

「ソレは靈界なのだ、アタイの庭みたいなものなのだ。」

「でもあそこまで手招きしてゐるのね？」

「あれは試験生徒なのだ？」

試験生徒？そしてなんで疑問形？

「アタイは3日で卒業したけど、基本はかなりの時間がかかるらしいのだ。」

「凄いな！お前。」

僕が梓を本気で凄いと思った。

するとそこで気が付いた。

「足って、ここにある可能性は無いの？」

「あ、人間界は探したけど、中々見つかんなかつたからありえるか

も知れないのだ。

そうか、じゃあ探してみるか。

「でも、深すならアタイだけでやるのだ。

そんな事を言ひだす辯の顔は眞剣だった

「アソタ世人間界で意識を意識を持つて

「おぬしは人間界で意識を意識を失ってから三日はかかる」

「では居ると、人間界での本体の寿命が短くなるのだ」

ソレは僕がこのあたたかく居る間に、僕本体が死んでしまうと言つたとか

!

「アタイが下界に飛ばすけど、枕元にあるノートは触らない方がいい

いのだ。死神が見える、そして名前など書いてはいけないのだぞ。」

「何そのデスノートみたいなの。」

「デスノートなのだ。

「うーん、どう変わったのかな？」

そんな感じでやがてここへ来たのであるが、やがて

不意に身体が軽くなり、意識が再び無くなつた

気が付くと、僕はベッドの上で寝ていた。

枕元にはノートがある、僕の手がそのノートの上に乗っていた・・・

「人間って面白。」

「いやああああああああああああああああああああああああああああ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8019y/>

僕の存在は幽霊同等

2011年11月24日20時29分発行